

ア ト リ エ 訪 問

橋内忠男氏

原義行氏



訪れると同時に開口一番「手を解き油でやられてね。毎日医者に通っているんだよ。」という彼の手を見るにこれは無残、十指の指がごとく皮がむけふやけたようになっていた。いつもテレビやリーシートに触れているうちにアレルギー体質の者はやられるという「ほりつておくと皮膚ガンになるかも知れないと驚かされた。」と阿々大笑する。時としてでる十年余の頑固な疾病であるそうだが絵描きの業のようなものを感じる。

畏友木田明二氏の設計になる20帖はあるであろうアトリエの壁という壁には旧作、新作、小品、大作がところせましとばかり満ち溢れている。これらの作品の群から語りかけてくるものは奔放と緻密、開放と緊張という全く相反する矛盾したものを含みつつそれらが奏でる幻想的にして、かつまた厳しい不思議な雰囲気をかもしだしている。

「美というものは自然から生まれ、自然から吸いとるものだ。」と淡々と語る彼の心の核の中にあるものは体質的なフロンティアの血であるとおもう。これらの作品から推しはかるに彼の性格は磊落であるが絵に対しては繊細な磨ぎすまされた神経を感じるのには私ひとりではあるまい。

「北方というものは明かるいものだ。われわれの世代からは暗い陰うつな北国という概念は生まれぬ。」と彼独特の風土性について語る。ものを面であらえるフォルム、色彩の純度や彩度をたいせつにする彼の絵は、ともすれば暗い重厚な絵になり易い独立系の作家にとっては異色の存在といわねばなるまい。

とまれ、66年のヨーロッパ旅行で得た有形無形の培養素の発酵と発芽を気長に期待している。

訪問者 後藤庸也氏

原義行君には、数年前ひそかに「キヤタピラ」なるアダ名を流したが、近頃本人にもその事を白状に及んで大げらに「キヤタピラ先生」と命名し、時にのぞんでそう呼ぶことにしている。

全道展審査の時など、「だけどネー」「チョット待つて下さい。」などと発言を求めたら、大勢不利となつた場合でも金輪際あとに引かない。落選の苦杯をなめた人も、入選の栄を勝ち得た人も、共にその「だけどネー」の影響を少なからず受けた筈だ。それが猪突に居ながら審査員の中から（スワツテイルトミエナイ）1.5mをゆさぶつて立ち上るという寸法だ。だからキビシイが愛嬌がある。

付合っているがムシヤラなわりにこまやかな神経をもつていて、苦勞人らしい蔭影を見せる。これが全道に名をハセたお母さん画家30余人の世話人も出来るユエンだろう。

目録編集委員の指示に従つて行きなれたアトリエだがあらためて訪問して見る。アトリエは16.5(10畳)と大きくはないが、しかし大きさなどというものは対象されるものの比例関係だから、キヤタピラ先生が中に立つと結構な居住性を感じさせる。それでも作品の方は正真正銘の100号120号だからふり廻すにはいささか不自由、近く改築の予定とか……

「絵出来なくて困つたデー」玄関先でいきなりドナツタが「清澄で詩のある絵、湖の底の様に寡黙で深く呼吸している様な、そんな絵が描き度い。絵つてむずかしいよなあ……」と、帰る頃にはあまり見せない神秘的な顔付きになつていた。



訪問者 小野垣 哲之助氏



サイン・宛名書きに最高です

赤青黒各¥50

ペンで日本橋 日本文具株式会社

ア ト リ エ 訪 問

一 木 万 寿 三 氏



ある土曜日の午後札幌の街が一瞥に見わたせる閑静な一木氏のアトリエをお訪ねした。個性的な奥様の出迎えを受ける。以前から何かなさる方ではないかと思っていたので不躰をかえりみずお聞きすると高浜虚子に師事し「現在」夏草の同人であるとのこと北国の情緒をうたつた美しい俳句を讀ませていただく。一木氏の物静かで温厚な人柄はよく昔に知られているところであるがその人柄プラス・アルファの魅力は奥様の内助の功大なりと感じさせられるものがあつた。磨き上げられた清潔なアトリエには美しく枯れたヒマワリやあじさい等が飾られ又壁面には風景や静物画等整然と並べられていて楽しい雰囲気をもし出している。氏は北海道生れで若くして上京、岡田三郎助に師事し帝展・一水会展に出品、すでに20数年になり東京生活の方が長いとこのことで基礎的メチエががっちりしているのもうなづけた。絵具はクローム系は使用せず絵具の変色には特に留意している由、筆は何十本とあるが、全部新品同様につやつやと白く輝いている。毎日描き終つてから筆洗油で洗い、そのあとさらに粉石練でよく洗うとの事、長持ちさせるためより何時も最上の描きやすい状態にして置く事が大切だとの言葉は当り前のことなのだが、誰にでも出来る事ではないと感じ入つた。兎角我々不精者には耳の痛くなるお話しだつた『絵描きには絵しか描けないというのがいいんでなまじつかほかのことなど出来ない方がいい』との氏のなにげない言葉の中に何時の時代でも変らぬ芸術家としての思想的深さと基礎的メチエとの不可分を再認識しながら手稲に沈む太陽を眺めつつ氏のアトリエをおいとしました。

訪問者 渋谷 栄一 氏

高 橋 北 修 氏

旭川市内、5条の通りに面した高橋氏経営の喫茶店「サモワール」脇の戸口を押して薄暗い階段を上り、2階のアトリエに氏を訪ねる。

東京時代、日本画家に弟子入りされた前後のお若い頃の苦労談などから話好きな温顔のお話はすぐさま佳境に入る。

氏「作品の成果というものは、作画の時の努力や苦労に案外比例しないものです。僕の知っている某なども、かつて文展出品のため死にものぐるいで制作をしていた。或る日僕が訪ねるとその絵がとても悪い。以前何気なしに描いていた絵の方がずっと良いのです。」

「僕の絵も、何かの意図を持たないで描いた方が良いでしょう。構図なども最初決めない。抽象の様に次々絵具をのせて行く裡に形が決つていき、絵が出来て行く。」

制作上の秘密について大変な示唆をふくんでいるように思い興味深くうかがいました。

最後に、最近のお休みの調子をうかがうと、

「先日狭心症が起きて良くないのですが、全道展までに60号をものしたいし、秋には東京へも出かけたい。」

と意気さかんところを見せられた。



訪問者 神田 比呂子 氏

カメラのデパート
10カ月払

札幌カメラ

ススキノ角
電話代(22)4157

ア ト リ エ 訪 問

遠藤未満氏



5月の暖かい1日、市街の西の方閑静な住宅街に先生のアトリエを訪ねた。手造りの練瓦製の朱と芝生の緑が鮮かに目を射る。

絵を描き始めて20数年一貫して先生が生れ、そして育つた広大な原野の詩情を追求して来られた。「遠藤さんの絵には詩がある」とよく聞く、そのことについて先生は「単に文学的な甘い詩情はきらいだ、造形性に支えられ、ピリットしたものが欲しい」とおっしゃる。丁度全道展の制作中

●先生が一番苦勞される所は

○私の絵は始めの構想が最後までスツと行かない、悪戦苦闘する、時間もかかる、何といても最初のデッサンが大切だ

○好きな色は一赤と青

○地塗りは一色塗りは必ずやる、これは大切だ、最近ローラーを使う

●絵具の外にこの辺など何かを混ぜているようですが石膏ですか、いや石膏は使わない、これです>みると絵の具の外にオガクズ、練瓦などがごたごたと置かれている。

画家が1枚の作品に取組んで10日も20日も、色をつけたり削り取ったり、描いたり消したり、手も顔もズボン迄絵具だらけにして苦闘する。この機械文明の世の中に何と原始的なと思う人もいるかも知れないが、この苦しみか作者にとつては何ものにも変えがたい楽しみであり絵から離れられない業なかも知れない。

(遠藤未満(本名満男)未だ我が作品満足出来ず、未満と号す。戦前道展に所属、戦後全道展に参加第5回展にて会員となる、苦小牧の美術発展に尽力する所大なり、また俳句をよくする。本年8月渡欧の予定。)

訪問者 大友一夫氏

八木保次・伸子夫妻

東京の西北、池袋から歩いて20分ばかりのところに、画家、彫刻家のアトリエ群が点在している一劃があります。かつてこれらはパルテノンと称されていました。

八木さん達のアトリエはその中の一軒です。赤いドアを押して入った途端、目白押しに壁を埋めつくしたグアツシユに圧倒されます。保次氏の作品です。アート紙に水彩、油彩等で自由に描かれたもので、油絵の重さがなく殊に最近、色が豊かに、美しくなつてきています。

保次氏は「多くの人の目につかないところでやつていることかもしれないが、一生懸命に仕事をして、どんなに小さくても一つの実を実らせたらそれでいいのでないか」と言っていました。

伸子さんのアトリエは、その隣りです。春陽会の大作の後、5月の北海道展の絵が出来たところでした。彼女の絵は一見、保次氏とは随分違うようですが「物を表現する時の強さなど保次氏の影響を受けているようだ。」とのことでした。

保次氏、伸子さんの絵の持味は、そのまま御二人の人間的な魅力となつていて、あの位、友人が訪れる家もないでしょう。

いつも華やかな色彩と、気楽な、暖かい雰囲気の満ちている八木夫妻のアトリエです。



訪問者 岸葉子氏

◆ あらゆる印刷のご用命は……

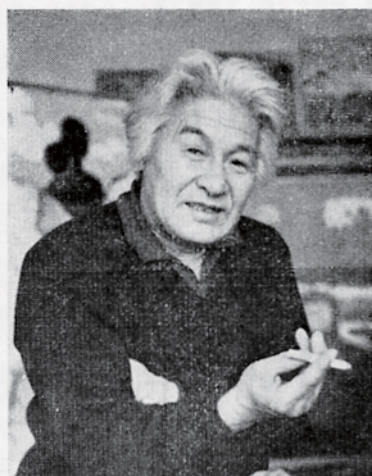
株式会社 共栄社印刷所

札幌市南1条東7丁目
電話 ㊟4756・㊟5923

ア ト リ エ 訪 問

国 松 登 氏

本 田 明 二 氏



札幌の円山の緑に囲まれた閑静な宮の森に氏のアトリエはある。数々の作品が創られたイーゼルには「氷人」の作品がある。柱や壁には外国の彫像や陶器などが飾られたのしいアトリエである。氏の生れたのは1907年。函館だと言う。生れた頃は印象派の末期。フオビズム運動が起きて間もない頃だった。17・8才頃絵に志ざしたその時やつと日本ではフオビズムの時代が来ていた。1930年協会展、三岸好太郎、里見勝蔵氏らのアカデミズムを破ろうとする運動が起きていたのである。多感な青年画家国松氏は枠からはみだしたところから絵が初められたと言う。

「その初志が現在まで続けられている。」と氏はさりげない言葉で表現するが裏をかえせば絵の枠を広げて絵を考えていることである。続けて「絵と言うものはこうでなければならぬと決めていない。広い立場から絵を考えている。」と言う。さらに今の若い作家にも、「常に枠からはみだしてほしいことを希望している。それに対して若い作家たちは流行の枠の中にはまづそこからはみだすことをしない。」と巾のない仕事からはみだす造形を期待している。最後に氏は、「いわゆる静画・人物画・風景画・という様な枠からはみだしたところから初めた僕は今でもその仕事の連続のようだ。」といつて真剣な表情からいつもの笑顔に返った。これらの言葉には氏の歩んで来た造形への歳月と生活が込められていた。

訪問者 野 本 醇 氏

私が彫刻の勉強をやりたくて、始めて本田先生のアトリエを訪れたのが、もう14年も昔の事、現在に至るまで月に二度や三度は行き来している。「これからアトリエを訪問に参ります」などと改まつて行くのは自分でも何にか変に思えて、別に連絡もせずに出かけた。あいにく夜でH先生は不在であつたが、アトリエの中一杯に広がった木のこつばの山や、散乱した道具などが日中の仕事の跡を生々しく残していた。

新しい木の香りの中に未だ荒削りの大きな馬の首や、レリーフが6・7枚重ねられ足の踏場も無い位いだ。

また、H先生の魚つりは有名で、色々な釣竿が壁に掛けられてある。制作の中途でも時々頭の中を空にするために早朝より山や海に一人て出掛けるらしい、そして帰ると、すぐまた仕事と、実に性的である。

ここ2・3年、制作の主体が木から土に移つてテラコッタの「ヤンシウ」や「馬」などがあり、私がこれ等の作品を始めて拝見した時、当り前の粘土という材料が、これ程新鮮な物に感じた事は無かつた。私も最近石にばかり心を奪われて、土より遠ざかつていたせいもあり、よけいその感が強かつた。

素材感を通して対象を良く見つめると言う事、またその中に生々しい生命の力を発見する事が、彫刻家にとって、いかに大切な事であるかをつくづく考えさせられる作品だつた。今又、この木のこつばの山を見て、改めて木に立向うH先生の「馬」や「ヤンシウ」に期待してアトリエを引上げる事にした。

訪問者 山 木 一 也 氏





北海道で生まれる!!

ト-ヨ-ゴ-ム靴

① 東洋ゴム工業株式会社
札幌ト-ヨ-ゴ-ム株式会社